



第33回「東書教育賞」の 審査を終えて

審査委員長 谷川 彰英

第33回東書教育賞受賞者の皆さま、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。個々の教育実践に関しては、このあと各審査委員の先生方からお話がありますので、私はICT部門を除いた、小学校、中学校部門の全体の講評を述べさせていただきます。

私が最優秀賞・優秀賞を受賞された6編の実践論文を拝見いたしまして、まず印象に残ったことは、今、学習指導要領で問題とされている、「社会に開かれた教育課程」ということです。たまたまICTを除く4編の論文のうち3編が、地域に関わって実践をされた大変力作の論文でした。実は今回の教育課程改訂の方向の中で、非常に大きな問題になっているのは、学校を取り巻く社会環境が大きく変貌しているということなのです。私は、これは今までなかったほど極端な方向に、日本の学校教育そのものが向かっているのではないかと考えています。

先生方がいちばん実感されているところでは、先生方と、「少子化」という言葉がありますが、実は少子化を超えて「人口減少」という問題が、日本各地で起こっています。東京周辺はまだ実感がありませんが、一歩外に行きますと、本当に地方の学校を取り巻く社会環境は大きく変貌していると感じます。つまり子どもがいなくなっているという現象なのです。そのことによって、農業や漁業といった一次産業の産業構造も大きく変わってきているのです。

少子化のみならず高齢化ということも実は多くの問題を生じております。今回の地域に関わる三つの実践は、それに非常に深く関係があるのです。

小学校部門・最優秀賞の宮内智鶴子先生、岐阜県美濃加茂市立古井小学校は、外国人児童が2割、発達障害系の児童が1割いる中で、新しい教育の方向性に取り組まれた大変貴重な実践でした。それから小学校・優秀賞の佐々木英明先生、北海道札幌市立米里小学校は、総合的な学習と社会科を関連させ、米づくりを体験させて日本の農業を考えようという実践でした。

また、中学校部門・優秀賞の加藤源也先生、岐阜県中津川市立苗木中学校はまさに先ほど申し上げた、少子高齢化の中での、地方のまちづくり、人材の育成を正面から取り上げた実践でした。

これからの学校教育では社会に開かれなければやっていけないという現状がある、そういう中で積極的に正面からこの問題に取り組まれた実践に、当然のことながら高い評価が集まったと言えると思います。

もう一つ、申し上げたいことは、この6編の教育実践を拝見しまして、教育実践を推進する力とは何かということを考えてみました。つまり戦後70年が経っておりますが、日本の教育界、教育学の世界では、ある時期までずっと「理論と実践」ということが言われてきたものの、最

近はあまり言われなくなってしまったのです。文部科学省が理論を出して現場が実践するような形になっておりますが、本来はもう少し研究者が頑張って自分の理論をつくるとか、そういう中で教育実践にこだわらなければいけないと思うのです。しかし、実は理論というのは、そう深く堅苦しく考える必要はないわけです。実践をするには、必ず実践者の中にその実践に対するビジョンや構想、あるいは全体のフレームがあるはずなのです。先生方の実践の記録を見て、それを強く思いました。やはり先生方の思いや願いがかなり前提にありまして、その基に実践をされているわけです。そういう実践力というのは、いったいどういうファクターで成り立っているか、私は三つのファクターがあるように思いました。

一つはアイデアです。ひらめきと言ってもいいですが、つまり今の学校の中で何に、どういふところに着眼して実践していったらいいのかという点です。それがある程度明確である実践がやはり評価されています。

例えば小学校最優秀賞の岐阜県美濃加茂市立古井小学校・宮内先生の論文ですが、さまざまな児童がたくさんいる中で、一人一人の子どもに「きらり賞」をあげたという話です。1年間に必ず全児童にきらり賞をあげるという、この発想はとても素晴らしいと思いました。一人一人の子どもにきらり賞をあげることと、実践者がきらりと光るということとは別ではあるのですが、共通していることがあります。やはり先生方の実践の中にきらりと光るアイデアや知恵が見られます。これはやはりいい実践をつくっ

ている一つのファクターだと思います。

二つ目は信念です。実践者の信念を一番強く感じたのは中学校最優秀賞の鹿児島市立甲東中学校・原口先生の論文です。先生は中学校で理科の授業をされたのですが、放射能や原子力の問題を教科書に飽き足らずに、3年間を通じてその実践をされました。私はこれにすごく信念を感じました。信念というのは、もっと別の言葉で言うと、教師としての意地のようなものがある、いい実践には意地があると思います。その先生なりの、どうしてもやってみたい、やらないと気が済まないという気持ちがやはりいい実践を生んでいると思います。

三つ目は実行力です。これはどの実践も素晴らしいものがあります。やはり教育実践というのは机の上でいろいろ言ってもしょうがないわけで、実際に直面している子どもたちに何かを訴えて、どういう手立てをして、どのように変えていくかという活動ですから、その意味では実行力というのはとても重要だと思いました。先生方は厳正な非常に厳しい審査を受けて、最優秀賞、優秀賞を獲得されたわけですが、これは一つの大きな成果であるわけです。

しかし、先生方のご意思と努力もあるけれども、それは自分自身だけがやったものではなくて、周りの環境、地域、学校、ほかの先生方との協働ででき上がったものだと考えていただけたらと思います。そうして培われた成果というものを、ぜひ周辺の先生方あるいは子どもたちに還元していただきたいということを、非常に強く念願しております。今日は第33回東書教育賞受賞、おめでとうございます。



ICTに関わる 論文の総評

審査委員

赤堀 侃司

受賞された皆さん、おめでとうございます。
私のほうはICT部門についての概要を簡単にご説明させていただきます。

今ICTというのは、ご存じのとおり学習指導要領で考えると、大きく二つあります。1点目は、ICTを道具としてどうやって活用していくかということと、2点目はプログラミング教育です。2020年度からの小学校では一つの指針として、学習指導要領が改訂されましたので、この二つに関連した論文が、それぞれ小学校、中学校で採択されました。

特にプログラミング教育については誤解されている部分もありますが、プログラミングというのは、いわゆるコーディングと呼ばれています。コーディングするというのはプログラム言語であるコードを書いていくという仕組み、活動。それをだいたいプログラミングと言っていますが、学習指導要領ではそう書いてはいない。つまり、私たちが生活しているいろいろな場面における、プログラムの思考を育むということです。それを見事に実践されたのが、小学校で優秀賞を受賞された佐々木香織先生の音楽の授業の実践です。

言われてみると、音楽というのは音符記号があって、音符記号というのはどれぐらいの長さで、あるいはどれぐらいの高さ、どれぐらいの休符で、というように指示しているわけで、指示するということはプログラムと言ってい

けです。

考えてみると、とことこ歩くこと、右足と左足を交互に動かすという繰り返しもプログラムであり、踊りであろうと音楽であろうと、あるいはいろいろな表現というものの本質には繰り返しや、リズムや旋律などを指示することによって生まれるプロセスが入っているのではないか、そこに気づかせたという論文です。

佐々木先生の実践は4年生が1年生に歌を贈るんだ、わかりやすく、伝えやすくするにはどうしたらいいだろうかということを考えては修正する作業を行いました。デバッグと言っていますが、人は成功ばかりではないのです。人生はほとんど失敗の連続だけれども、そこをどうやって修正して乗り越えていくか、そこに、我々はその人の生き方に共鳴するわけです。プログラミングで最も大切なのはデバッグではないかと思うのです。そうすることで、子どもたちが、1年生に伝えるにはもっと親しみやすくなくてはいけないとか、旋律をこうしたほうが良いと気づいていくのです。

実はこの実践を拝見して、私はふと思い出した実践論文がありました。第26回東書教育賞小学校優秀賞受賞「和文化教育で一人一人に確かな力をつける学校文化の創造」です。広島県河内小学校の実践ですが、児童一人一人がソロで童謡をリクエストに応じて歌うというものです。自分はこの歌だ、この歌を歌うんだと曲を選ぶ

し、授業のはじめであったり、場合によっては地域の人たち、おじいちゃん、おばあちゃんが来校した際、誰それさんのあの歌を聞きたいとリクエストすると、その子どもたちが歌を歌ってくれるというものです。実はこれが広島テレビでも放映されて、子どもたちには物怖じしないで自己表現できる確かな力がつき、学力向上にも貢献したということでした。

その論文を思い出しまして、なるほど、人はプログラミングによって自信をつけたり、課題を修正することで問題を乗り越えていったりして、自信をもつことができるということを感じました。この論文を見ても、その子どもたちが今度は自分の親に歌を贈りたいというようなことにも発展しており、それが非常に印象に残っております。

2点目は、中学校で優秀賞を受賞された茂原伸也先生の特別支援学校での理科の実践です。これも従来からある方法ですが、ICTをどうやって教科や授業の中に、道具として共存するか。ICTがすべてではないことは誰でもわかっていますが、使い方によって、授業が生きもすれば死にもします。これを見事に実践されたのが茂原先生です。

理科は、なんと言っても実験が生徒の興味を引くのではないのでしょうか。私も高等学校で理科教員を何年かやったことがあります。茂原先生がおっしゃるように、手足を動かし、表現することの楽しさと、人と関わることの喜びを味わうことができると考えられ、ストローロケットの実験につながった。ストローで重りをつけて、角度やおもりの位置をいろいろ変えて、どのぐらい遠くまで飛ぶか、特別支援の子どもたちは夢中になってそれに取り組んでいます。これが、やがてサイエンスショーにつながっていくわけです。

しかし、茂原先生はふと単に楽しい、おもしろいだけでなく、それを伝える説明活動にもっていきたいと書いています。そこに私は非常に意味があると思いました。

この実践では、自分でやったことは、確かに楽しい。ストローロケットを遠くまで飛ばせることに夢中になるだろう。しかしそれだけでは単なる活動であって、本当の自分の認知、脳にどれだけ響いて定着したのかということについては、どうだろうか。やはり、実験で学んだことを人に伝えていくこと、コミュニケーションしていくこと、自分はこうやったらこうなったということを伝えていくという説明活動を取り入れたことで、初めて気づくのです。伝えるために言葉だけでは無理だったら、動画を使う、映像を使うわけです。そうした道具を使いながら、最後はこれを広げる活動の中でSkypeを使って、さらに広げていくという活動をされています。

それはICTに限らないです。私たちは、目が悪くなれば眼鏡をかける、腰が痛くなれば杖をつくのと同じように、道具と共存しながら、自分も持っている資質、能力、スキルを十分発揮するように活動しているわけです。道具と共存しながら子どもたちが活動するというICT活用の素晴らしい実践として、高く評価をさせていただきました。

プログラミング教育とICTの利活用における論文は数は少ないですが、非常に優れた報告、論文がありましたことをお伝えさせていただきたいと思います。



審査委員

鳥飼 玖美子

宮内先生、最優秀賞おめでとうございます。宮内先生の論文は、「自己肯定感をもち、他とよりよい共生ができる子の育成」というタイトルでございました。宮内先生の小学校は岐阜県にあります。この学校では外国人児童が2割、そして発達障害傾向のある児童が1割以上存在するというので、なかなか運営が難しい小学校の中で、どうやって子どもたちに自己肯定感をもち、そしてお互いが共生を図りながら自分自身も伸びていくかという試みです。

何をなさったかと言うと、基本的に二つです。子どもたちそれぞれのよさを自分自身で認識させる、そしてそのために基礎学力をつけていくということです。この二つの試み、具体例としていろいろなことをなされています。その中で私が、これはおもしろいと思ったのは、外国人児童は、いつも日本語の授業をあまりわからないまま聞いているという立場にあるのですが、立場を逆に、今度はその子どもたちに、例えば母語であるポルトガル語、あるいはタガログ語で自分のことを話してもらい、いわば授業をしてもらうわけで、これはもちろん先生の中でその言語ができる方が通訳をなさったわけですが、そうすると日本人の児童たちは、「そうか、言葉がわからないってこういうことなんだ」という友達のつらさというものを思いやることができる。それと同時に母語で話すことを許された外国人児童が、今度は自己肯定感をもち

つ。たまたま日本語が不得意だから勉強には苦労しているけれども、自分の母語で話せばこんなにいろいろなことが言えるんだということで自己肯定感をもち、することができる。これはさまざまな試みが学校の中でずっとなされている中のたった一つの事例ですが、こういうことを通して、これまで自信のなかった子どもたちに自己肯定感をもち、そしてお互いが思いやりをもって共生していくという、いわば多言語・多文化共生社会への一歩を小学校でつくっていくということなのです。

私がこの論文が素晴らしいと思いましたのは、実は小学校の新しい学習指導要領では、今まで活動だった英語が、3、4年生に降り、5、6年生は教科となります。これは初めての試みです。今、小学校の英語教育関係者は非常に意味で心配をしている。今まで以上に英語を嫌う子どもたち、あるいは英語に自信のない子どもたちが増えるのではないかと危惧です。まだ実際に小学校でどのように英語を教科としてやっていくかということについてはすべてが確定したわけではありませんが、少なくともそれぞれの小学校において子どもたちに自己肯定感をもち、それを第一義に考えていただけると、英語という教科についてもうまくいく一つの手立てになるかなと考えました。

英語については今回非常に論文の応募が少なく、小学校英語についても少なかったことについては、やはり先生方の不安が大きいのではないかと気持ちもありますが、あまり英語を知識として教えるということに気持ちを奪われるのではなく、教育の原点に戻って、一人一人の子どもたちが自己を認め、自己のよさを認め、そして自信をもって進んでいくことに心を砕いて英語という教科を扱っていただけたらと、この優れた論文を拝読しながら強く思った次第です。素晴らしい論文をどうもありがとうございました。



審査委員
武内 清

専門の教育学の観点から応募論文を読ませていただきました。応募論文は学習指導要領をかなり意識したものが大変多く、それ自体も大事だとは思いますが、しかし、教育学の立場から申しますと、二つのことがとても大事だと思います。一つは地域に生きる子どもの生活や関心に結びついたものであること、もう一つは科学的な認識をきちんと植えられるものであるということです。

今回選ばれた実践論文は、この二つの要件を満たしているものが多くありました。

中学校の部では、最優秀賞を受賞した原口先生の「中学理科3年間のまとめとしての『原子力・放射線』授業」も、科学的な認識を生徒たちの生活や興味と結びつけて実験や観察によって深めたものというように言えると思います。

その内容を簡単に申し上げますと、放射能というものはわれわれの生活の中にあるもので、それを放射線量測定器で生徒自身が測定し、さらに放射線を遮断する物質を実験で確かめ、そして放射線が異常に拡大した福島原発事故や、これまでの広島、長崎への原爆投下、それからこれから起こりそうな核戦争のことまで、生徒たちに想像力を働かせるようなさまざまな指導の工夫をなさっています。原口先生が福島へ取材旅行をしたことや、また生徒たちを長崎へ修学旅行させることなども結びつけて、この問題を考えています。理科教育を中心にしながら

も、教科横断的に他の時間とも関わり、修学旅行などとも結びつけながら、生徒の学びを確実にアクティブなものにしていると思いました。

このように子どもたちの身近なところから発想しながら、実験、観察によって科学的な思考を養い、そこから行動にまで結びつける教育実践は、今の時代に求められているものであり、全国のモデルになると思います。受賞おめでとうございます。



審査委員
東原 義訓

受賞された先生方、おめでとうございます。私はICT関連の論文を主に拝見させていただきました。中学校の茂原先生、そして小学校の佐々木先生の論文で共通するのは、私は「表現」というキーワードだと感じました。中学校の茂原先生の実践では、肢体不自由の生徒は、その肢体のどこかの部分が不自由というだけでなく、表現力に課題があるということを最初に指摘されていました。これが論文の最後のほうに行きますと、表現することによって人と関わり、コミュニケーションのできる生徒に育て上げられています。

ポイントは三つありました。一つ目は表現したいものをもつということです。何か表現したいものがなければしかたがないわけで、それが理科の教科の中身であって、実験の結果や、その結果が得られる理由を自分で説明できるのだ

という思いが強くなったということ。

二つ目は、それまで先生方がつくられていた理科室新聞を生徒に自分でつくらせたこと。そのためには、いろいろな教科の先生が、教科の領域の専門からチームとなってご指導されたことによって、その生徒の表現する力が向上してきたこと、そしてそれをICTの力を使って取りまとめたといったという三つの要素がうまく組み合わせられて、生徒が素晴らしい表現力をもつに至ったということです。先生の愛情あふれる、そして生徒を温かい目で見つめられておられる、随所でさまざまな工夫をされていると感じられる論文でした。

小学校の佐々木先生の実践は、赤堀先生もご覧になられている授業なわけですが、私はプログラミングに関してこれからの可能性として、二つのことをポイントに思っています。一つは、プログラミングというのは誰しもが身につけたらいい新しい問題解決の手段であることと、もう一つは、やはり誰でもが身につけたほうがいいであろう表現の手段だということです。

今まで表現と言いますと、スピーチや弁論大会や絵を描く、あるいはダンスなどが表現だったかもしれませんが。しかしこれからの表現力は、そういうものがすべて複合されたものになるだろうと思うのです。例えば、パワーポイントを使ってアニメーションで格好いい表現はできますが、限界があるわけです。しかしそこにプログラミングを入れますと、今までできなかったようないろいろな表現を考えることができることになります。音楽もその一部ということになります。佐々木先生の実践論文は、プログラミングが人の表現力を増大させる具体的な例を示してくださったものと私は感じています。先生方、おめでとうございます。

審査委員

露木 昌仙



受賞された先生方、誠にありがとうございます。私は小学校で優秀賞となられた札幌市立米里小学校佐々木英明先生の実践について所感を述べさせていただきます。小学校社会科では、佐々木先生が、「ヒト、モノ、コトとの関わり」というようにおっしゃっておりましたけれども、中でも人の営みや人同士の関わりをどのように子どもたちに見つめさせていくかということを特に重視したいと考えております。そのような考えで佐々木先生の実践を見ますと、新潟の米づくりの指導に加え、地元北海道でアレルギー対応米「ゆきひかり」を生産する山本英幸さんの米づくりを取り上げていることに目を引きました。

子どもたちの米づくりでは、種もみから苗を育てる段階から、何度も山本さんの指導や助言を受けているのだらうと思います。米づくりを日々体験することで、米づくりに対する興味、関心が高まるわけですが、例えばもみから苗をつくる段階でも、自分たちは一生懸命やっているのに山本さんのようにはうまくいかない。そういったことから、やはりプロとしての山本さんのすごさのようなものを実感したに違いないということが想像できます。

山本さんは、芦別市で農業を営んでいる方で、平成28年度には国の新嘗祭の際に献上するお米をつくれるなど、地域の農業生産をリードされている方です。アレルギー対応米の「ゆきひ

かり」は無農薬栽培なわけですが、通常の品種は農薬も用いて生産している。学校での米づくりが進む中で、児童が稲を育てる水田でも、農薬を使用することにならざるを得なかったのではないかと思います。

そんなときに山本さんの「ゆきひかり以外は農薬を使っている」とか「使わなかったら水田管理は不可能」というような言葉に、子どもたちはきっと農業の本質の部分で大きな意味を感じたのではないかと思います。米づくりの、例えば無農薬というような理想を語るだけではなくて、山本さんの米づくりの本音の部分までをきちんと教材として児童に提示しながら子どもたちが学んでいることに、大変好感がもてました。このようなところが、佐々木先生のおっしゃっている多角的、多面的な見方、考え方が育まれることにつながっているのだろうと思います。

また、同じ北海道とはいえ、ご自宅のある札幌から芦別まで100km以上も離れているわけですが、おそらく芦別市の山本さんのところに、まず佐々木先生が興味をもち、何度も訪問し、種もみを分けていただいたり、稲作についての話を伺ったり、アドバイスをを受けたりしながら実践を続けたに違いないということを感じ、興味深く、実践を読ませていただきました。

審査委員

壺内 明



東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。私からは、中学校の部で優秀賞を受賞されました岐阜県中津川市立苗木中学校長の加藤源也先生の教育実践研究について講評並びに感想を述べさせていただきます。

加藤源也校長先生おめでとうございます。先生は、総合的な学習の時間を利用して「地方の『まちづくり人』を育てる試み」というテーマで、現行の学習指導要領は勿論のこと、次期学習指導要領の目指す、「社会に開かれた教育課程」の実現を意識しながら学校を挙げて実践されました。学校経営者として、子どもたちの現状や地域の実態を的確に捉えて、地域の課題にもなっている地域の活性化と生徒たちに地域への愛着と地域に貢献できる能力を育もうとして取り組まれました大変優れた実践研究であります。

地域観光PR「事業」に生徒自らの発想で取り組ませることによって、地域への愛着と地域貢献できる能力を育もうとして地域の皆さんの協力を得ながら準備し、本番の第2学年での篠島研修で具体的に取組の成果を実践しました。

「苗木に観光客を呼び込もう大作戦」と銘打って、「苗木地域に観光客を呼ぶ込むために、2泊3日の篠島研修のどの場面でどんなことをすればよいか」の活動計画を生徒たちが一生懸命になって考え、企画をして実行しました。活動内容においては、地域のよさや魅力に関する「苗木検定問題集」を作成して勉強し、観光PR活

動として、郷土料理「五平餅」づくりから観光パンフレット作成、ソーランライブや合唱、さらには「苗木城址PR動画」まで自分たちで作成するという一人一人のアイデアを総結集して実践活動を展開しました。その反響はどうかというと、見事に花開き、「たくさんの拍手！」や「アンコール！」という声が響き渡り、今まで体験できなかった数多くの成果を上げることができました。

生徒の中には、苗木地区の紹介を英語で紹介したり、さらには中津川市全体の紹介まで発展したことは、考えてもいなかった大きな喜びになったのではないかと思います。

「総合的な学習の時間」を利用した地域貢献活動を通して、生徒一人一人に自信と誇り、さらには将来に向かっての地域貢献できる力と自信を身につけさせたことは大きな意義があります。まさに、主題にありますように地方の「まちづくり人」を育てる学校における最大の教育的な成果であり、高く評価をしています。

先生の学校運営構想の重要な三つのキーワードの一つであります「苗木を愛し地域に貢献」を総合的な学習の時間を利用して、生徒たちとチーム苗木中の職員が一体となって推進したことは、苗木事務所をはじめ地域の皆さんにとっても子どもたちへの将来を期待する思いが込められているのではないのでしょうか。どうぞ、多くのご苦労があると思いますが、今後とも継続して、このような教育実践研究を続けられますようご期待しております。本日は、誠におめでとうございました。